
平成 25 年

11 月の普及活動状況

ダイジェスト版

～県下 10 農林事務所農業普及課と農業経営課技術支援係の取組～



岐阜県農政部農業経営課

活力ある新産地づくり

郡上農林 ■ にんじん 秋出荷順調、春まち出荷準備

ひるがの高原にんじんの秋出荷が10月23日から始まった。今年は8月の干ばつの影響を受け、生育にやや遅れが見られたが、高単価（1ケース2,000円以上）にも恵まれ、概ね順調な出荷となっている。

また、農業普及課の支援のもとで、ほ場では春まちにんじん出荷に向けた準備も行われており、写真にあるように資材を使ってトンネル保温を行いにんじんの肥大を促している。



【トンネル保温の様子】

恵那農林 ■ クリ ぼろたん「焼き栗・生栗×スイーツ」夢のコラボPR販売、実現！

管内クリ栽培農家及び支援機関で構成する東美濃ぼろたん研究会は、ひがしみの農業祭(11/10)において、品種「ぼろたん」の「焼き栗・生栗×スイーツ」コラボPR販売を行った。

これまででも、加工による付加価値向上のため、イベントで焼き栗・生栗の販売は行ってきたが、今回は地元菓子・料理店(3店舗)へ商品化研究を依頼して創作いただいたスイーツ(タルト、ロールケーキ、マロングラッセ、和風デザート詰合せ、和風プリン)も限定数量で販売し、好評のうちに完売となった。なお、購入者に対して行った外観・食味・許容価格等のアンケート結果は、協力3店舗へ提供して、今後の商品開発に活かしてもらうこととしている。



【ぼろたんスイーツの数々】

今後も増産が見込まれる「ぼろたん」は、イベントでの焼き栗・生栗販売だけでは消費に限りがあり、加工業務用向け等の安定した販路の確保がこれからの課題である。農業普及課では、今回の協力3店舗を中心に更なる農商工連携の模索を促し、一層の商品研究と店舗販売に結び付けてもらい、その商品価値が高めることで、原料クリを出荷する農家の所得増加につなげる狙いで進めていく。

売れる農畜産物づくり

岐阜農林 ■ いちご ハウス内環境の改善を工夫

いちごハウス内の環境を改善して、安定的に収量を向上させるため、農業普及課ではパソコンなどを使って温度、湿度、二酸化炭素を適正に制御するハウス内環境制御技術の導入を進めている。これまでに、適正に温度が測れる通風筒温度測定装置の作成講習会を各地で開催し導入を支援し、次の段階として、光合成促進装置を効率的に使用するためのコントローラーの導入を高設栽培者を中心に支援した。



【装置作成講習会の様子】

西濃農林 ■きゅうり 促成栽培の巡回研究会の開催

10月30日に、海津胡瓜部会促成栽培の巡回研究会が開催され、農業普及課からキュウリ黄化えそ病対策を中心に今後の栽培管理等について支援を行った。特に抑制作型での栽培は、11月下旬から12月上旬に終了を迎え、半促成作型栽培の定植期となる。この切り替え時期にキュウリ黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマ等の害虫を残さないよう、植え替え作業時の栽培管理についての支援を行った。

揖斐農林 ■小麦 新品種「さとのそら」の大規模実証始まる

揖斐地域の小麦はイワイノダイチが作付されているが、最近の産地や需給の動向を踏まえて、新品種「さとのそら」の大規模実証試験に取り組むことになった。

実証面積は10ha（揖斐川町3ha、大野町3ha、池田町4ha）で、10月下旬から11月上旬にかけては種が行われた。

実証試験では、慣行栽培から基肥の種類と量、栽培適性や品質を調査する計画である。

農業普及課は、農協と連携して、実証ほの設計や調査計画を樹立し、生育調査等をしながら指導を行う。



【「さとのそら」のは種】

中濃農林 ■ゆず 香り立つ「かみのほ ゆず」集荷スタート

関市上之保地域で特産品の「ゆず」の収穫が、11月2日から始まり、集荷場は爽やかな香りにあふれた。今年は、春の低温や夏の少雨、残暑等、ゆず栽培にとっては厳しい気象条件となり心配されたが、11月中旬で20tの集荷があり、昨年の収量を上回る見込みである。

農業普及課では、新品種の検討やA品率の向上、ゆず皮の活用さらに組織運営等について調査や助言等を行ってきた。

今年は、春の低温や夏の少雨、残暑等、ゆず栽培にとっては厳しい気象条件となったものの、11月中旬で20tの集荷があり、昨年の収量を上回る見込みである。

上之保地域が「ゆずの里」として益々発展するよう引き続き支援を行っていく。



【集荷中のゆず】

東濃農林 ■新技術導入普及支援事業 直売野菜の周年生産に向けた簡易ハウス導入の試み

管内では、きなあた瑞浪、駅北ファーム等新たな直売所が誕生しているが、冬場の野菜生産が少ないのが難点である。そこで、農業普及課では支柱用のアーチパイプを活用した簡易ハウスに着目し、生産を実証することとした。これは通常のパイプハウスより設置費（被覆材込み約10万円/a）が安く、容易に設置できるほか、夏場は「支柱」、冬場はビニールを張って「ビニールハウス」と、年間を通して様々な野菜の栽培に活用できる点がポイントである。

今年度は多治見市や瑞浪市の野菜づくり塾実習圃場をはじめ、8か所に簡易ハウス実証圃を設置した。現在は夏秋なす・きゅうりなど夏野菜の作付を終え、ホウレンソウ等冬野菜の栽培を行っている。実証農家では、設置の手軽さや、夏秋野菜の長期どりに手



↑【簡易ハウスでの上【ホウレンソウ栽培状況】
左【夏場は支柱としてなす等を栽培】

ごたえを感じており、他の農家の関心も誘っている。

今後は、直売所の研修会や野菜づくり塾等での紹介、需要の掘り起こしを行い、直売野菜の周年生産のきっかけづくりとして行きたい。

農業経営課 ■夏秋ナス 新技術導入広域推進事業（夏秋ナス独立袋栽培の実証）

夏秋ナス独立袋栽培は、今年度、農業革新支援専門員が中心となり、新技術導入広域推進事業を活用して、県下3地域4カ所で現地実証に取り組み、普及拡大を目指している。

今年度の現地実証もほぼ終了したことから、実証成果の検討と次年度の計画打ち合わせのため、11月13日に第2回事業推進会議を、関係農業普及課、中山間農業研究所と開催した。

成果の検討では、遮光資材による培地温の温度上昇抑制から、適度な草勢維持による、生育と果実品質の改善効果が確認できた。しかし、被覆肥料を主体とした現在の肥培管理では、後半の肥効がやや弱く、肥培管理方法の改善が必要であった。

26年度に向けての実証方向については、中山間農業研究所と連携した肥培管理を中心に栽培技術改善を図るとともに、独立袋栽培の現地普及を進めてゆくこととしている。



【ナス独立袋栽培の実証】

多様な担い手の育成・確保

可茂農林 ■堂上蜂屋柿 新規栽培者確保に向け、「柿塾」開講！

美濃加茂市の特産で、「食の世界遺産」や飛騨美濃伝統野菜にも認定されている堂上蜂屋柿は、高齢者や婦人を中心に生産されており、今後の生産減少が懸念されている。

農業普及課は、新たな担い手確保に向け、これまでに新規生産者の育成を目的とした就農塾の開講等の提案を関係機関に行い、関係者と協議を重ねてきた結果、本年11月から新規生産者育成講座「柿塾」を開講することになった。

「柿塾」には7名の参加があり、3月までに加工技術と栽培技術を学び、計10回の講習を予定している。農業普及課はJA営農指導員とともに、講習内容の検討や技術指導に当たっている。



【柿塾受講風景（皮むき）】

下呂農林 ■スイートコーン 新たな園芸品目の産地化を目指して

下呂市における新たな園芸品目の産地化を目指し、スイートコーンの産地化に向けた打合せ会議を、11月14日に下呂総合庁舎で開催した。

会議では、農業普及課から「下呂市スイートコーン産地戦略会議」の立ち上げについて提案し、合意を得た。また、参加者から産地化に向けたアイデアが多数出されるなど、将来の産地化に向けて活発な意見交換が行われた。

11月27日には第1回戦略会議を開催し、産地化に向けた計画づくりをスタートした。



【スイートコーン産地化会議】

飛騨農林 ■ 指導農業士等 後農業継者育成について高校・指導農業士・普及課で意見交換

飛騨高山高校、指導農業士、農業普及課らで組織する農業教育連絡協議会による意見交換会が、11月13日に64名参加のもと飛騨高山高校山田校舎で開催された。

この協議会は、関係機関が連携して農業後継者を育成するため40年以上前から組織されており、当日は指導農業士から農業の魅力といった講義、生徒から研究活動紹介の他、高校生の短期研修について、意見交換が行われた。

高校からは、農業士宅での宿泊研修が生徒の人間としての成長に大きく役立っており今後も継続して欲しい等の意見が出された。農業普及課での農家の選定や研修での支援方法など、今後のコーディネートを進める上で業務に反映すべき事項を確認することができた。



【意見交換の様子】